

あいらの歴史と物語

歩き・み・ふれる歴史の道「小山田地区をめぐる」

始良市教育委員会社会教育課文化財係 池田 亘

5月29日(土)に小山田地区の史跡を巡りました。新型コロナウイルス感染拡大防止を考慮し、日程を半日に、募集定員を30名に減らして実施しました。

小山田の地名の由来は定かではありませんが、寛弘3年(1006)～明応5年(1496)に加治木を支配し加治木氏4代頼光の子、資頼が小山田地区を領有して小山田姓を名乗り始めていることから、少なくとも当時から「小山田」という地名があったと考えられます。

当日巡った史跡は、大きく分けて以下の4つに分類できます。

- ① 中世の加治木の様子を伝える文化財(小山田氏墓・大井上神社・中田遺跡・渋谷兵庫の助墓)
- ② 江戸時代の交通・流通に関連する文化財(金山橋・山神石祠・龍門司坂)
- ③ 龍門司焼に関連する文化財(扶蔵院墓地・龍門司焼古窯・荒神社)
- ④ 加治木の自然に関連する名勝地(龍門滝、五老峰)

①からは、小山田地区が中世に加治木氏が統治していた時代から利用されており、加治木城も含めて重要な場所であったことが分かります。②からは当時の主要街道・大口筋の一部である龍門司坂に関連した史跡をたどることで、当時の人々の往来を感じることができます。そして、③では約300年連続と続く龍門司焼で、生活に密着する焼き物を製作した陶工たちの技術と歴史を目にする



ことができました。④では江戸時代後期に薩摩藩が編纂した「三国名勝図会」にも掲載されている名勝地を見ながら、景観やその謂れについて解説しました。

今回巡った小山田地区はなかなか紹介する機会がなく、史跡が少ないと思われがちかもしれませんが、実際には古代から近世までの史跡が数多く残っており、このような場所についても再度目を向けていく必要性を認識した一日でした。

「漆の麓を歩く」～ガイド実践研修～

迫村 あけみ

始良歴史ボランティア協会では、ガイド実践研修として、蒲生町漆地区を取り上げ、3月27日(土)に実施しました。



漆は、蒲生町北部、四方を山に囲まれた盆地にあります。蒲生の中心地から10kmほど後郷川に沿って山道を走ると、視界が開けてのどかな田園地帯に入ります。現在の姿とはうらはらに、周囲の山々は戦国時代の山城跡で、蒲生合戦の戦場となり、切手園に陣を張った島津義弘と、蒲生方を救援した^{きつてその}^{け どういん} 祁答院氏の武将・楠遠江守の軍勢が戦いました。

漆を陥した義弘は50戸の武士と25門の百姓を移住させると、人々は山裾に家を見て盆地の中央に田畑を開いて耕作しました。

今も道端には「漆の田の神」や「石塔の田の神」などの石像が残っています。また、鎌倉時代の「永仁五輪塔」などの石塔が、かつて寺があったと言われる地域に数多く残されていることも興味深いところです。

本来ならば2月に実施する予定のところ、新型コロナウイルスの心配もあり、3月に延期した結果、幸いにも桜の開花と重なり、川沿いの道



の満開の桜を楽しみながら歩いた半日でした。

歴民館企画展「水神一碑に刻まれた先人の記録」

竹之下 洲一

歴民館で3月2日から4月29日にかけて、水神碑の拓本展示が行われました。始良市では市誌編さん事業の一環として、3年ほど前から水神碑を調査し、主に「あいら拓本研究会」が採拓した63基の中から16基を選んで、拓本が展示されました。

水神は水にまつわる神の総称で、川の氾濫を鎮める神であったり、稲作に必要な用水路を祀る神でもあり、飲料水を汲む井戸に祀られる神であったりして、各地に水神碑を見ることができます。

展示資料の一つに、加治木金山橋の傍らに建つ「板井手水神碑」があります。その碑文を読むと、住民は早くから板井手の滝の上流に井堰を設け、加治木城内へ用水路を引いていました。江戸時代の寛永8年(1631)の大洪水で、井堰が破壊され修築が行われたこと、さらに、慶応3年(1867)5月の始良地方の大洪水でも破壊され、大工事が行われたことなどが記録されています。この水神碑は、慶応4年閏4月、川の氾濫を鎮め、用水路の安全を祈って建てられたものです。

展示された水神碑には、それぞれの地域の歴史があり、人々の切なる願いが込められています。暮らしに不可欠な水に対する、先人の切実な思いが感じられる展示でした。



令和3年度 蒲生中学校郷土学習・史跡めぐり

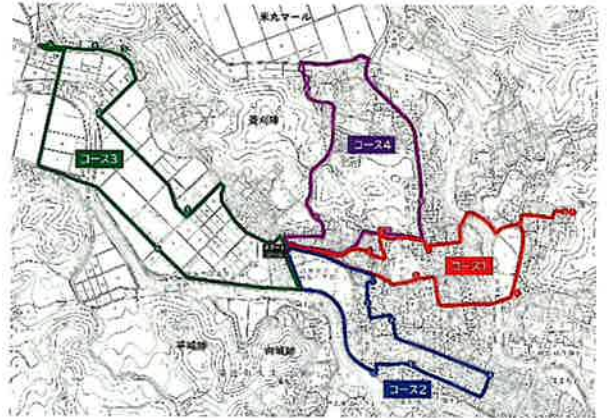
昨年度までは麓を中心とするコースを組分けして巡りましたが、今年度からテーマを設定した4つのコースに分けて実施しました。5月25日(火)、早かった梅雨入りにもかかわらず晴天に恵まれ、3年生の生徒たちと共にコース内の史跡を巡りました。各コースの担当から寄せられた記事の一部を紹介します。

コース1：蒲生氏の歴史探索

コース2：蒲生麓と人々の暮らし

コース3：古代から中世の蒲生

コース4：蒲生の大地〈ジオ〉と自然



コース1：蒲生氏の歴史探索

橋木 雅晴

第1班は「蒲生氏はどのように蒲生を治め、最後はどうなったか」をテーマに巡りました。蒲生八幡神社・戦役記念碑群・法寿寺跡と蒲生どん墓のほかに、蒲生麓の10石以下の下級武士の副業として、紙漉きが行われていたという蒲生和紙工房跡を訪ねました。ここには、「浩宮徳仁親王殿下手漉きと紙御覧お成り之碑」があり、今上天皇が皇太子時代の昭和63年に川東の伝統工芸士・野村正二氏邸宅を訪問されています。明治17年(1884)には297戸が紙漉きに従事し、蒲生は和紙の名産地となり、里謡に「蒲生は紙漉き、吉田は木売り、加治木たかんばっちょ、帖佐かまげ」と唄われたと説明しましたが、はたして何人に理解してもらえたか気になるところです。

コース2：蒲生麓と人々の暮らし

宮内 伸一

最初に蒲生観光交流センターで、蒲生麓が日本遺産に認定されたこと、鹿児島藩の外城制度と麓について説明しました。

蒲生麓の変遷や特徴、現在の様子など案内板の絵地図をもとに詳しく説明しましたが、生徒の皆さんは、熱心に耳を傾け、メモを取っていました。改めて、蒲生の町の歴史や伝統・文化等のすばらしさについて認識を深められたのではないかと感じました。かねて見慣れた町でも、改めて見直すと、町のあちこちに「歴史の息吹」が感じられたのではないかと思います。

コース3：古代から中世の蒲生

吉田 茂子

コース3は、古代から中世にかけての神々と人々の関わりを訪ねるコースでした。

まず古代(奈良時代)に創建されたとされ蒲生郷の総社であった楠田神社を訪れ、古代官道に思いを馳せました。

次に、今は久目家の氏神を祀る久目神社(古くは久馬神社)に行きました。境内に残る毘沙門天は北方を守護し、隣の不動明王は人々を仏の教えに導く役目を担っています。楠田神社と共に古代を身近に感じられるパワースポットだと感じました。

二つの神社の周囲には、田の神や水神、塞ノ神碑跡などもあり、あちこちで八百万の神を感じられるコースでした。

生徒の皆さんは、風化に耐えて立ち尽くす石像などを見て何を感じ取ったのでしょうか。

コース4：蒲生の大地〈ジオ〉と自然

竹之下 洲一

コース4は、校区内の史跡や地質学的に価値がある「ジオサイト」を中心に巡るコースでした。

今年2月桜島・錦江湾ジオパークに始良市も加わったことで、蒲生町にある「ジオサイト」の一つ「米丸マール」の形成のあり方や米丸温泉との関係などを学習課題として、特に強い関心をもって巡検に臨んでいました。

「米丸マール」が約8千年前の水蒸気爆発による噴火口跡であること、その時の火砕流や火山噴出物が「上久徳の地層」に見られることなどを知って、驚いた様子でした。

始良歴史ボランティア協会 新人紹介

今年度新入会員となりました2名を、自己紹介の形で紹介します。(順不同・敬称略)

黒木 竹幸

中津野在住の黒木と申します。私は昨年4月に薩摩川内市から転勤で始良市に引っ越し



て来ました。新たな街で少しでも地域の事を知りたいと、令和2年度始良市歴史ボランティアガイド養成講座を受講させて頂き無事に終了する事ができました。始良市は私にとって新たな土地でもあり興味をひく史跡・文化財が多くあります。今後は研修で学んだ事を更に深く勉強し、その知識の中で分かりやすく魅力を伝えられるガイドとしてのスキルを身に付けたいと思います。まだまだ学ぶことが多くありますが、これからも宜しくお願いいたします。

永田 善彦

令和2年度始良市歴史ボランティア講座を受講し、本年4月から始良歴史ボランティア協会に加入しました永田善彦と申します。平成28年3月に定年退職し、4月から始良に住むようになり6年目



になります。職に就いてから定年退職するまで、県内12カ所の職場に引っ越し勤務しました。平成15年に始良に家を建ててはいましたが、退職するまでの13年間は、自宅には年に数日泊まるだけでした。現在、平日はまだ仕事をしている関係上、定例の行事やイベント等へはあまり参加・手伝いができない状況ですが、

始良市には史跡や文化財等がとても多いので、いろいろなことを早く覚え、慣れ親しみ、ボランティア協力できるように頑張っていくつもりですのでよろしくお願いたします。

始良市誌別巻4で紹介の 新聞記事を読んで

文之和尚祠堂安国寺の落成式と祝賀会

新園 淳一郎

昭和10年4月29日鹿兒島朝日新聞の記事として、**文之和尚祠堂安国寺の落成式と祝賀会**が紹介されています。

安国寺は、足利尊氏・直義らが醍醐天皇以下の南北朝の戦いの戦没者の菩提を弔うため全国に建立した臨済宗の寺院です。戦国時代には島津義久により招かれた南浦文之が住職を務め、島津義弘もしばしば訪れたと言われています。

その後、安国寺は明治初期の廃仏毀釈で廃寺となり、寺の奥にあった文之和尚の墓も荒れてしまいました。しかし、昭和になり復興の機運が高まって先輩有志の巨費を投じた再建が始まり、昭和10年4月28日、県内各所から約1,300人の関係者が集まり、大規模な法要並びに落成式が行われ、大祝賀会が開催されました。記事の最後にも「蔵王岳山下は歎天地喜湧き返るような一大祝賀の新天地を展開するであろう」と記されています。

編集後記

新型コロナウイルスのワクチン接種も始まり、東京五輪の開催の可否が論じられる時期の編集作業で、何かと気ぜわしいことでしたが、これが発行される時期にはコロナウイルスが終息に向かっていることを願う次第です。